



# 安積の歴史シリーズ



## 第23回 近世 戊辰戦争と安積郡

柳田 和久 (やなぎだ かずひさ)

郡山市文化財保護審議会  
委員



### 江戸城 無血開城

慶応4年(1868)正月、鳥羽・伏見の戦いに勝利した新政府軍は、中国・四国・九州を掌握すると、東海道・東山道・北陸道の三方から江戸に向かって進撃を開始した。<sup>(1)</sup> 東海道先鋒軍は3月12日に品川に到着し、13日に東山道軍も板橋に到着、少し後れて北陸軍も千住に着き、3月15日の江戸城総攻撃に備えた。3月13日・14日に勝海舟と西郷隆盛が会見し江戸城は無血開城となった。新政府軍は5月に上野戦争で彰義隊を破り、旧幕府軍や新撰組等も関東の各地で戦ったが敗北した。<sup>(1)</sup> その後、新政府軍は会津に向けて兵を進めた。

### 奥羽越列藩同盟

慶応4年3月に、奥羽鎮撫総督に任命された九条道孝が仙台に入り、東北諸藩に会津藩・庄内藩の追討を命じた。<sup>(2)</sup> 仙台藩・米沢藩等は会津藩の謝罪をもって平和解決の道を探っていた。東北の諸藩に詔請状を廻達し、白石において奥羽列藩会議を開いた。主な議題は会津藩の寛典<sup>かんてん</sup>処分の嘆願であった。閏4月12日に仙台藩・米沢藩は、会津藩

主松平容保の謹慎・封地の削減・鳥羽伏見戦争の責任者処刑の嘆願書を奥羽鎮撫総督に提出した。しかし、総督府参謀世良修蔵と意見が合わず嘆願は聞き入れられなかった。そのため、仙台藩・米沢藩は藩兵を引き揚げた。次いで会津討伐に出兵していた二本松・棚倉・相馬・三春・平・泉の6藩や、庄内藩討伐に出兵していた盛岡・弘前・秋田・新庄・山形等の8藩も撤兵した。<sup>(2)</sup> 会津・庄内藩を支援する東北諸藩は相互協力関係を強化するため、5月3日に仙台・米沢・二本松・守山・棚倉・三春等の25藩が「奥羽列藩同盟」を結び、同月6日には越後国の新発田・村上等6藩が加わり、31藩からなる「奥羽越列藩同盟」が成立した。<sup>(2)</sup>

### 北越戦争

新政府軍は関東を掌握すると、越後口・白河口・平潟口の三方から会津に向けて進撃した。<sup>(3)</sup>

新政府軍は長岡城を攻撃するため新潟港に上陸した。閏4月から7月にかけて、長岡城をめぐる新政府軍と同盟軍が烈しく戦った。しかし、7月28日に四日市藩が降伏し、7月29日に長岡城が落

城すると、8月2日には三根山藩、3日には黒川藩、4日には村松藩、11日には村上藩が降伏し、越後地方は新政府軍の統制下に入った。8月28日には米沢藩が降伏した。北越戦争に勝利した新政府軍は会津に向け兵を進めた。<sup>(3)</sup>

### 白河口の戦い

白河は奥羽列藩にとって最大の要地であった。白河城は奥羽鎮撫総督の命によって仙台・棚倉・二本松・三春・泉・湯長谷の各藩兵が守備していた。慶応4年閏4月20日に会津藩が白河城を攻撃した。白河を守備していた各藩兵は会津藩と戦う意思がなかったため、会津藩は容易に白河城を占拠した。<sup>(4)</sup>

新政府軍は、5月1日に大田原や宇都宮辺りに在陣していた諸隊を再編し白河城を攻撃した。戦闘は雷神山・立石山・稲荷山で繰り広げられ、激戦のすえ新政府軍が白河城を奪取した。

しかし、新政府軍が白河城に入城しても、同盟軍が棚倉城を固めており、容易には進軍できなかった。6月16日に新政府軍が平潟港に上陸すると、棚倉から平城に急遽兵を出したため棚倉城は手薄となった。そこへ参謀板垣退助等が土佐・薩摩等の藩兵を率いて棚倉城を攻撃した。棚倉には前藩主阿部正外<sup>まさと</sup>がわずかな兵で守備していたが、正外は城に火を放ち逃れた。6月25日に新政府軍は越後高田藩の釜子陣屋（白河市東釜子）を焼き払い同盟軍を一掃した。同盟軍は、7月1日と同月24日に白河城の奪還を計ったがいずれも失敗に終わった。<sup>(4)</sup>

### 平潟口の戦い

6月16日に新政府軍は平潟港に上陸し、6月28日に泉城を、翌29日に湯長谷城を落とし、7月13日には激戦のすえ平城が陥落した。

新政府軍は、平藩を制圧すると平潟口の軍を二つに分け、一方は相馬方面に、一方は三春方面に兵を進めた。相馬方面に進軍した新政府軍は、8月4日に中村藩を、9月15日に仙台藩を降伏させ、22日に列藩同盟主輪王寺宮が平潟港総督府に書

状を遣し謝罪した。<sup>(5)</sup>

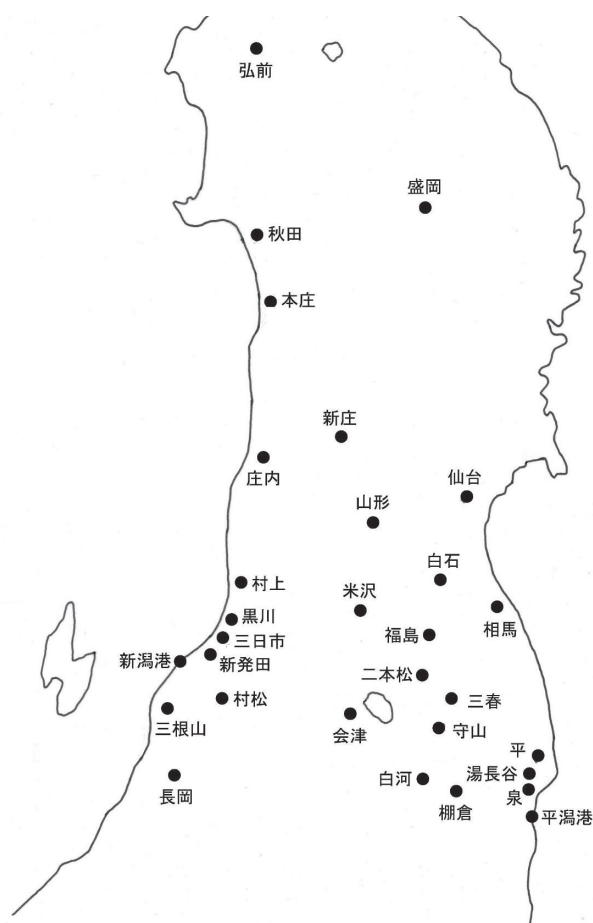
一方、三春方面に兵を進めた参謀渡辺清左衛門は、7月25日には上三坂まで進軍し、小野新町の二本松藩勢を攻撃した。小野新町には二本松藩の大谷与兵衛等が詰めていたが敗走した。<sup>(6)</sup>

7月24日、板垣退助等は棚倉を発し、25日に蓬田に宿陣、翌26日には三春に達し、続いて渡辺清左衛門も三春城に入った。三春藩は戦わずして降伏し城を開け渡した。27日には守山藩も降伏した。<sup>(7)</sup>

### 会津藩の落城

三春・守山藩が降伏すると、板垣退助は本宮に渡辺清左衛門は小浜に進撃した。7月29日に新政府軍は二本松城の総攻撃を開始した。供中口と大壇口で烈しい戦となったが、いずれも敗れ二本松城は落城した。大壇口の戦いでは二本松少年隊の悲劇を生んだ。<sup>(8)</sup>

8月20日、新政府軍は会津に兵を進めた。翌21



第1図 主な藩の位置図

日に、会津兵や幕臣大鳥圭介が率いる伝習隊や新撰組等と母成峠で戦い、22日に十六橋まで達し、同日の夜には戸ノ口原に進出した。

前藩主松平容保は白虎隊を率いて滝沢村まで出陣した。白虎隊は戸ノ口の様子を探りに行き戦闘に巻き込まれ戦死した。残った白虎隊は水路づたいに飯盛山に出たが、城下が燃えているのを、城が落城したと思ひ込み飯盛山で自害した。<sup>(9)</sup>

中山口・御霊櫃口これいびつぐち・勢至堂口せいしどうぐちを守備していた会津兵は、新政府軍が戸ノ口原まで達したとの急報を受けると、退路が遮断されるのを恐れ一斉に退去し、次々に若松に戻り城内に立て籠った。<sup>(9)</sup>

新政府軍は、石筵口・白河口・越後口から進軍し、9月22日に若松城は開城した。同月24日に盛岡藩、27日には庄内藩が降伏し、翌明治2年5月18日に北海道五稜郭の旧幕臣榎本武揚が、新政府軍に降伏し戊辰戦争は終息した。<sup>(10)</sup>

### 戊辰戦争下の安積郡

会津討伐を命じられた仙台藩は、慶応4年4月13日に藩兵1,500名が仙台を出発し、20日に郡山宿に着いた。郡山に3日間滞在し23日から大槻村に宿陣した。<sup>(11)</sup>

これに対し、会津藩は奥羽山脈の藩境に兵を出し土湯峠よつじょうげや楊枝峠・御霊櫃峠等で警戒した。4月19日に土湯峠で仙台兵と会津兵が交戦し、閏4月3日の晩に御霊櫃峠で戦闘となった。同月5日にも会津兵10数人と仙台兵10数人が、御霊櫃峠で小競り合いとなり怪我人を出した。<sup>(11)</sup>

安積郡の村々は幾度となく会津兵による放火や強奪にあった。4月23日に中山・竹ノ内が放火された。同25日の晩には会津兵6人が多田野村にやって来て、そのうち2人が村内に入り込み、大勢の農民に追い掛けられたので放火して逃げ去った。閏4月朔日に再び多田野村へ押し入り大久保の家々を放火した。同月5日には休石、翌日には多田野村堀口、同7日には河内村の瀧に放火した。同10日夕7ツ時（午後4時）頃に会津兵70人余が、八幡村より町守屋・駒屋村に押し入り村々に放火し、同11日には下守屋村の水山・大田宅の土蔵を

はじめ村の土蔵を壊し、諸品・金銭等を奪って逃げ去った。<sup>(11)</sup>

### 大槻組村々の打ち毀し

会津兵の放火・強奪が繰り返されるなか、農民の打ち毀しが始まった。慶応4年閏4月13日に、安積郡の農民が鍋山村の西原に集まり、野田新田・鍋山・駒屋・川田・成田・荒井・八幡・只野・山口・大谷・塩原へ押し出した。総勢は富岡村関ノ上まで詰め農民約千人が結集した。<sup>(11)</sup>

一揆を鎮圧するため、仙台兵の一隊が駒屋村より富岡村まで繰り出し、夜8ツ時（午前2時）頃に大槻へ帰陣した。二本松藩は若党・小者を連れ鎮圧に向い、夜は富岡村の関ノ上や鍋山村の西三本木に宿陣した。翌14日には、二本松藩士成田助九郎・内藤隼人が兵士25人、ほかに足軽・目付等を率い鎮圧に向い八幡村に宿陣した。さらに、5月25日に二本松藩士30人が多田野村へ繰り出し、7月下旬まで警戒にあたった。<sup>(11)</sup>

### 農兵の取り立て

不穏な状況が続くなか、藩の主導により安積郡村々より農兵を取り立て警戒に当たった。人数は、郡山宿200人、郡山組100人、大槻組100人、片平組100人の500人である。農兵の組織は、頭1人・農兵4人の5人を1組とし、10組を合わせて50人を1備とした。郡山町の農兵は4備、郡山組・大槻組・片平組は2備に編成した。1備には指揮長を1人ずつ付けた。郡山宿では、町役人である今泉久右衛門・今泉久三郎・今泉定七郎・菊池市三郎が指揮長となった。<sup>(11)</sup>

### 郡山宿の打ち毀し

7月27日、二本松城の落城を待たず藩主丹羽長国は米沢に退いた。家臣は会津・米沢・仙台に逃げ落ち、郡山の三代官も29日の朝には引き払った。郡山は二本松藩役人がいなくなり不穏な情勢となった。

今泉久三郎・阿部茂兵衛・武田太左衛門・永戸直之介等は、郡山宿の治安を新政府軍に依頼する

ことにし、今泉久三郎・永井喜作・横田治右衛門・万宝院等を新政府軍のもとに遣した。4人は笹川村の口留番所で新政府軍の大村藩に郡山宿の警戒を願い出た。隊長は「小人数であるので兵を分けることができない。これから須賀川の賊軍征伐に向かうので、帰ったら郡山へ参る」と申し出かけた。同日夕方に大村兵100人が戻り、何度も郡山に滞陣するよう懇願したが、土地不案内を理由に阿久津村に引きあげた。<sup>(1)</sup>

8月1日、富田村荒井屋敷の百姓数人が、郡山宿の郷蔵の西垣を破り米を取り出した。それを郡山の者が聞き付け数百人が郷蔵に押し寄せた。今泉久三郎・阿部茂兵衛・武田太左衛門・川口半右衛門等が米7～8百俵を手配し、1軒に1俵ずつ渡したのでそれぞれ家に帰った。

しかし、その夜5ツ時（午後8時）郡山宿の者どもが再び集まり、郡山の商人宅に押し入り打ち毀しが始まった。まず佐藤伝兵衛宅に押し入り家を打ち毀し、川口半右衛門・高橋徳治・小針直左衛門・今泉伊左衛門・宗形与右衛門・横山貞吉・武田太左衛門・今泉与一郎・叶屋彦兵衛・藤屋惣左衛門・今泉久右衛門・五十嵐安吉・山田屋吉兵衛宅等を次々に打ち壊し、質地証文等を焼き捨て質品を持ち去った。

一揆は安積郡の村々に波及した。8月2日の夜9ツ時（午前0時）、川田村・成田村の百姓が大勢押し寄せ、川田村の村役人宅や土蔵を打ち毀し、暁7ツ時（午前4時）頃に野田新田に向かった。同日に大槻村の百姓が名主相楽半右衛門・安齋太郎右衛門宅や嘉兵衛宅を打ち毀した。3日には多田野村、4日には下守屋村の名主宅が一揆勢によって打ち毀された。<sup>(1)</sup>

一揆勢が村々へ引き上げると、その夜、町守屋村に屯集していた会津勢80余人が、駒屋村で夕食を済ませ郡山に向かった。<sup>(1)</sup>

### 郡山宿ほぼ全焼

8月7日に会津勢が郡山宿に放火した。6日の夜9ツ時（午前0時）頃、会津勢150人程が郡山に押し寄せるとの知らせが成田村より届いた。郡

山宿では直ちに阿久津村にいる新政府軍に知らせる一方、郡山の出入口を農兵で固めた。<sup>(1)</sup>

夜も開け始めたころ、会津勢が如法寺辺りより所々へ放火した。町人達は狼狽し四方へ逃げ去った。阿久津村より新政府軍が到着したところには会津勢は逃げ去ったあとだった。その日は、西北の風が烈しく吹いていたため大火となった。夕方までに、上町は南の2軒を残し全焼、下町は安楽屋兵四郎宅・升屋久兵衛宅まで焼失した（郡山セントラルホテル辺りから旧トポス跡地辺りまで焼失）。阿弥陀町・東町・北町・稲荷町・蔵場町・郷蔵門前・如法寺・陣屋の代官屋敷・町足軽宅・牢屋や本陣等も焼失した。東町の端6軒、稲荷町は西の方30軒が残ったのみで町の大部分が焼失した。<sup>(1)</sup> さらに、会津勢が放った鉄砲球が、清四郎（30歳）の後頭部に当たり死亡した。<sup>(2)</sup>

8月13日に、会津勢が再び郡山に押し寄せ、焼け残っていた善導寺に火を付け町内を荒らし廻った。町役人は直ちに守山へ知らせた。備前兵や守山兵が到着したところには、賊達は逃げ去り1人も残っていなかった。この火災によって善導寺や鐘樓門が焼け落ちた。両度の火災により郡山宿の大部分が焼失した。<sup>(3)</sup>

会津勢は、14日には岩瀬郡館ヶ岡で乱暴を働き、本宮宿にも放火した。<sup>(3)</sup>

### 註

- (1) 『東京百年史』第1巻
- (2) 『二本松市史』1
- (3) 宮地正人『幕末維新変革 下』
- (4) 『白河市史』二近世
- (5) 註2・註3
- (6) 註2
- (7) 註2・註4
- (8) 註2
- (9) 『会津の歴史』
- (10) 註3
- (11) 『郡山市史』9資料（中）
- (12) 郡山市歴史資料館所蔵今泉家文書政治17
- (13) 註11